

学会記事

第18回徳島医学会賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなりました。年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各期ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名～2名に贈られます。

第18回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定いたしました。受賞者の方々には第235回徳島医学会学術集会（夏期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金10万円及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は次号（63巻3,4号）に掲載の予定です。

（大学関係者）



氏 名：平坂勝也
生 年 月 日：昭和53年9月5日
出 身 大 学：徳島大学大学院栄養学研究科
所 属：徳島大学大学院ヘルスパイオサイエンス研究部生体栄養学分野

研 究 内 容：蛋白質分解

受賞にあたり：

この度は第18回徳島医学会賞に選考していただき、選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

私は、JAXA（日本宇宙航空研究開発機構）と共同で、寝たきり（Unloading）や加齢による筋萎縮の原因として筋組織への免疫細胞（主にマクロファージ）の浸潤に関する研究を行ってきました。その研究の中から、ユビキチン依存性蛋白質分解経路がマクロファージの活性化を制御していることを見出しました。興味深いことに、免疫系細胞のユビキチン依存性分解経路の律速酵素である Cbl-b ユビキチン連結酵素の活性を阻害すると、マクロファージが脂肪組織に著明に浸潤することがわかってきました。これらの知見は、マクロファージの Cbl-b を介したユビキチン依存性蛋白質分解経路が糖尿病の発症

に重要な役割を担っていること示唆するものでした。実際に、Cbl-b 遺伝子欠損マウス由来腹腔浸出性マクロファージと脂肪細胞の共培養を用いて解析を行った結果、炎症性サイトカインが亢進し、脂肪細胞でのインスリン抵抗性が見られました。近年、メタボリックシンドロームの基盤病態として脂肪組織における慢性的な軽度の炎症反応が注目されており、今回の研究はそのメカニズムの解明の一因となると考えております。今回の受賞を励みに、これまで以上に研究に邁進していく所存です。

最後になりましたが、今回の研究にあたり、色々ご指導、ご助言いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

（医師会関係者）



氏 名：笠原正臣
生 年 月 日：昭和47年4月22日
出 身 校：徳島大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科
所 属：寺沢病院放射線部（リスクマネジメント部会兼務）

研 究 内 容：糖尿病ケアのリスクマネジメント

受賞にあたり：

この度は、第18回徳島医学会賞に選考していただき、選考委員の先生方をはじめ関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

私は平成6年から診療放射線技師として日々の放射線診療業務に従事していますが、平成16年からは当院でのリスクマネジメントに関する業務も行なっております。

私たちが日々業務を行っている医療現場にはさまざまな危険因子が存在しています。患者に安心して診察と治療を受けていただくためにもリスクマネジメントは現在の医療現場においては必要不可欠となっています。リスクマネジメントはこれまでは個々の職員の能力に依存しがちでした。しかしながら日々業務を行うのはあくまでも「人間」であり、「人間はエラーを起こすもの」と考え、組織として事故防止に取り組むようになってきています。当院ではこのための取り組みとして「エラーから学ぶ」ということを実践しました。つまり、ヒヤリ・ハット報告から危険因子を探り、職員に周知徹底することにより事故を未然に防止するというものです。今回のテーマでは糖尿病診療・治療に関するヒヤリ・ハット報

告書を洗い直すことから始めました。分析を進めていくうちにさまざまなことがわかり、糖尿病療養指導士会と共同し、全看護職員を対象に注意すべき点や周知すべき項目についてセミナーを行い、エラーを未然に防ぐシステム作りに努めました。

今回の受賞を励みにし、リスクマネジメント活動を

より活発に行い、患者に安心される安全な医療サービスを提供できるように活動を続けていこうと思っています。

最後になりましたが、今回の発表にあたり、ご指導いただきました寺沢病院 鶴尾美穂先生ならびに寺澤敏秀先生に深く感謝申し上げます。